山鳩の聞き倣(な)し

◉

大倉克己

一

尾張藩の出川村は名古屋城から見て、北東の方角へ約四里（約十六キロメートル）のところにある。村人が城下町に行くには、まず村の小道を辿って善光寺街道とも呼ばれる下街道（しもかいどう）に出たあと、南に下る。二里ばかり歩くと勝川宿に着き、さらに一里歩き続けると大曽根に着く。ここから町の中心に入るのが最も早い。

出川村で百姓をしている吉十は大曽根まで妻のすへを送り届けるため、家を出発したばかりだ。

村の小道は田圃や野原ばかりを横切っているが、所々で雑木林を掠めている。十月も半ばだが、雑木林では多くの葉が黄褐色になったまま枝に付いているので、林の中が見えるほど透けていない。

「テデ、ポーポー。テデ、ポーポー」山鳩が鳴くが、姿は見えない。

「子が、欲しい。子が、欲しい」

と、すへには自分の心が見透かされているように聞こえる。そう聞こえるのは、これから大曽根へ奉公に行けば、子が貰える機会があるかもしれないと思っているからだ。

奉公するといっても長い間ではなく、これから三月の初めころまでの農閑期だけ、旅籠の下働きをすることになっている。

「吉十さん、あたしから言い出した奉公だけど、上手く務まるか心配になってきました」

二人には子がいないから、すへは夫を名前で呼ぶ。

吉十には、すへが心配することより、別の心配がある。

「すへ、大曽根に行っても、他人（ひと）様の赤子を抱こうとか、一時だけでも赤子と一緒にいてぇとかの料簡をおこしてはならんぞ。人攫（さら）いの咎者（とがもの）にでもなってみろ、縁座でわしばかりか、連座で五人組のみんなが咎をこうむるぞ。『五軒の内一人にても不埒（ふらち）之有るに於いては、五人同罪たるべき事』というのを知っているやろ」

「分かっているよ、あたしだって。だけど、可愛い赤子を見ると物狂いになってし

まって……。奉公先では、そんな料簡は起こさないから……」
すへは着替えが入った風呂敷包みを左手に持ち替えると、歩きながら右手を顔にあてて忍び泣きをした。
吉十は、堅苦しい五人組帳前書に書いてあることなんか持ち出して、すへを余計に悲しくさせてしまったと悔やんだ。

ひと月くらい前、すへが他人の赤子を攫おうとしていると思われたことがある。
出川村から歩いて半日ばかりのところの小牧村に、五穀豊穣ばかりか子授かりの御利益もあるといわれている田縣神社がある。その神社へ吉十とすへは朝早くからお参りに出向いたことが三度もある。行く度、神社で二人は一番高額なお札を買い、男の子が授かりますように、と何度も祈った。それ以外にもすへは、「たとえ、捨て子でもいいですから授けて下さい」と声に出さずに祈った。
三度目のお参りの帰り、野菜畑の横を歩いていると、道端に藁(わら)のつぐらに入った赤子がいる。吉十には畑で仕事をしている男女が見えたので、あの二人が赤子の両親であることが分かっていた。ところが、すへは赤子を見るなり、「こんな子が欲しい」と、周りに目もくれないで赤子をつぐらから取り上げて抱いた。
「一時だけでもいいから抱かせてくれよな」
赤子をあやすように言うと、二、三歩歩いた。
「人攫い、待てぇ！」
畑の男が鍬を振りかざしながら走ってきて、すへの前に立ちはだかった。女も少し遅れて着いた。
すへの行動に呆気にとられていた吉十はあわてて、すへと両親の間に割って入り、「赤子があんまり可愛いので、嬶(かかあ)がつい抱きたくなっただけで、攫おうとかの悪気があった訳ではねぇ。勘弁して下せぇ」
平謝りに謝って、事なきを得た。

吉十とすへは夫婦になって八年も経つのに、子が出来ない。
三、四年経つまでは、子宝というものは焦っても授かるものではないから気長に待てと親類の者たちは言っていた。五、六年も経つと、吉十の嬶は石女(うまずめ)だから子宝は諦めたほうがいいと、陰で言われるようになった。

ここ一、二年は、吉十の親類の者から、
「嫁は後継ぎを儲けるための借り腹という道具じゃ。道具が役に立たなければ、取り替えるしかあるめぇ。世間で言われているやろ、女子（おなご）、子なければ去るべし、じゃ」と、離縁を強制されるようになった。
そんな圧力にも、吉十は応じず、
「子は欲しい、だが、嬶はすへが良（え）ぇ。すへとは添い遂げるつもりじゃ。子が出来なかったら、親類から養子を貰えば良ぇ」と、すへと別れる気は全くない。
すへだって、親類の次男や三男を養子に貰うことが難しくないことは知っている。お上は、小百姓の田畑が細分化されることを恐れて、惣領以外の子に田畑を分配することを禁じている。次男や三男は奉公に出るか、職人に預けられることになる。そうでなければ、兄と住むことになる。そのような男の子を養子に貰うこともできる。ただ、どの農家でも、男の子は大事な働き手だから、兄と住むには住屋が手狭になるほど成人してからとか、兄に別の働き手である嫁が来る頃ようやく、次男や三男は養子に出される。そういう養子とは親子の情が育まれないので、すへは物心ついていない小さな子が欲しい。養子を貰うなら、生まれたばかりの子を里子に貰うか、いっそのこと、捨て子を引き取ったほうがいいと思っている。
吉十がすへを離縁しようとしないので、親類の者は吉十がいないときを見計らって、すへに実家へ帰るように説得しに来たことが何度かある。
「跡継ぎもいねぇおめぇたちが年老いて野良仕事ができなくなったら、年貢米が納められなくなるだろう。そうなれば、おめぇたちばかりか五人組にも越度（おちど）が申し渡されるので、そうなる前に、五人組の誰かがおめぇたちの田畑を耕すことになるだろう。やがて家は潰れる。親類として、そうなるのを黙って見過ごす訳にはいかん。ここは、すへから進んで実家に戻ってもらいたい。そうなれば、吉十も子を産める後添えが貰える」
すへは親類の薄情さに屈したくなかったが、自分が去ることで、いつも良くしてくれる吉十のためになるならと、一度は自分から実家に戻ったことがある。吉十はすへを連れ戻しに来て、「子なんかできなくとも良ぇ、おめぇがいればそれで良ぇ」と優しく言ってくれた。子を産まなくても吉十の心にこんなにも叶う自分が却って情けなかった。
苦しみのあまり、村にある尼寺の比丘尼に相談しに行ったこともある。比丘尼は、

ある書物を持ちだしてきて、読んでくれた。
『婦人七去の法というは、一には父母に従わざるは去る、二に子なければ去る……七に盗みすれば去る』とあります。けれども、そのあとに、『その婦人の心柔らかに、婦の道にそむかずして、夫や舅の心に適いなば、婦人を出だすに及ばず。或いは又、妾に子あらば、妻に子なくとも去るに及ぶべからず』ともありますよ」
すへは『七去の法』の件を聞いたときは落胆していたが、後のほうの『妾に子あらば……』の件に元気づけられた。早速家に戻って、妾をつくって後継ぎをつくって下さいと吉十に懇願した。吉十は「女を囲むほど裕福ではないし、おめぇ以外の女は抱きたくない」と言うばかりだった。それでは、金のかからない飯盛女にでも産ませて下さい、と頼んだ。それにも、吉十は「おめぇはわしを他所の女に抱かせたいようだが、わしはそんなことしたくねぇ」と全然取り合わない。
子が、とにかく子が欲しいと四、六時中思っていると、拾ってでも、攫ってでもいいから、赤子を一人、吉十に差し出したい気持ちが頭の中にいっぱいになる。
それで先月、すへは自分でもどうしてそうしたのか分からないが、小牧村の山縣神社の帰り、他人の子供を抱き上げて二、三歩、歩いてしまった。

つい半月ばかり前の秋祭り、二人は村々を渡り歩く祈祷師に子ができるように祈ってもらった。
祈ったあと、祈祷師はおごそかに、
「子を生ずるの理は、女男の生気を通じてなり。子をつくらんとして房事に励めば、陰門の性気も陰茎の精気も失せ果て、生気に至らずという。かくなる上は、双方の性気と精気が爆ぜる寸前まで溜るよう、交接をしばし慎むことが肝心であるぞ」
と、二人に申し渡した。
祭りが終わって二人は家に帰って寝床に就いた。体には祭りの興奮が残っていたが、祈祷師の言葉が気になって、何もせず仰向けのまま並んで寝ていた。
「吉十さん、さっきの拝み屋が言うようにするなら、少しの間、別々に暮らしたらどうやろ？」
「実家に戻ることを考えているのか？　わしは嫌じゃ」
「それも考えましたが、別のことですよ。これから春まで野作は暇だから、その間だけでも城下町で奉公してみるというのはどうですかね？　そうすりゃ、銭も少し

稼げます」

すへはこう言いながらも、町だったら捨て子がいるかもしれないし、子を産んでも里子に出したい女に出会えるかもしれないという期待が、内心にある。

吉十は渋々賛成したが、どうしても奉公するなら出川村になるべく近いところでして欲しいので、「大曽根が良えぞ」と言った。城下の北東にある大曽根は城下から続く町並みの端ではあるが、下街道の出入り口として商業が盛んで、商店や茶店が立ち並ぶところである。

三日後、吉十は大曽根に出向いて、人づてに口入れ屋を探し、すへでも務まりそうな旅籠の下働きを紹介してもらった。

二

すへの仕事は掃除とか炊事の手伝いだったので、半月もすると仕事に慣れ、休憩する時間も上手く取れるようになった。勝手口近くで休んでいると、竹の小枝を持った女が近づいてくる。長衣の小袖の上に袖なし羽織を着ていて、歳は自分より少し上の三十歳頃に見える。

「生霊（いきりょう）、死霊（しりょう）の神降ろしー、生口（いきくち）、死口（しにくち）の口寄せーをして差し上げますー」

呪文を唱えているように聞こえる。

女に何をするのかを聞こうと思っていると、勝手口の中から、掃除に戻りなさいと年嵩の下働きが呼ぶので、中に戻った。掃除をしながら、あの竹の小枝を持った女は何者ですかと尋ねた。

その下働きは掃除の手を休めず、教えてくれた。

あの女は市子といって、表向きはどこかの小さな神社お抱えの巫女らしく、あちこちの村に祭礼や年中行事があると、出かけて行って祝詞をあげたり、お祓いをしている。それ以外にも口寄せといって、死んだ人や生きていても遠方にいる人とか、訳あって会えない人の心を、呪文を唱えて招き寄せ、心中を語らせることもできる。街道に立って、身分の高そうな旅人とか銭離れのよさそうな旅人に会うと、その口寄せをしたり、旅の安全を願う歌をいろいろ歌って、銭を稼いでいる。旅人の少な

い時期には町で、口寄せをする。神事をしているので、読み書きもできるし、故事にも詳しい物知りである。そんな巫女でも、旅人の夜の慰めの相手を務めることもある、ということだった。

次の日の昼下がり、市子が勝手口にまた現れた。すへは昨日（きのう）の夜、次に市子が現れたら口寄せをしてもらおうと決めていたので早速、頼んでみた。

「巫女さん、生口をして下さい。霊を寄せたいのは、あたしに生まれてくる赤子ですが」

「できますよ。で、お腹（なか）の子は何箇月で？」

「お腹に？　うーん、まだ出来ていません」

「では、どの子の口寄せをしたらいいの？」

「いつか生まれてくる子です。その子に聞いてみたいのです、どうしてあたしのお腹に宿らないかを」

「そんなの無茶ですよ。まだ生まれてもいない子は、生霊にも死霊にもなりませんよ……。一体全体、どうしたことなんですか？」

すへは、市子が訝しがることに答え始めた。

夫はここから三里ほどの出川村で百姓をしている。自分は石女で子ができない。このままでは、後継ぎが出来ないし、家が絶える。けども、成人した養子は貰いたくない。夫だけの血がつながった子でもいいから欲しい。妾にでも女郎にでも子を産ませて自分たちの子として育てようと、夫に何度も頼んでいるけど、夫は自分以外の女と寝たくないと言い続けている。

市子はじっと聞いていたが、溜息をつきながら言った。

「それは可哀そうに。でも、いい亭主だな、おまえさんがよっぽど好きなんだ……。おまえさんが言うように、何とか他の女に産んでもらえればなぁ……」

「他の女に」と聞くと、すへは年嵩の下働きが言ったことを思い出した。

「巫女さんは夜に旅人の相手もするそうですね。あたしの夫の相手をして子を産んでくれませんか。お礼は十分にしますよ」

あまりにも突拍子もないことなので、市子は驚いて声高に罵った。

「おまえさんは何ということを！　私を女郎だと思っているの！　確かに、高貴なお方に夜の慰めをすることはありますが、それは女郎のやっていることとは違いますよ。小百姓の男なんて、とんでもない！」

「ごめんなさい。女郎のように銭のために夫と一夜を過ごして下さいと言っているつもりはありません。あたしが巫女さんのお腹を借りたいのです。それに、巫女さんは祝詞の読み書きもできるし、ご身分の高い人とお話ができるくらい気品の高い方だから、そんな血を分けて欲しいと思っただけです」

すへのこの言い訳を聞くと、市子は少し目を上向かいにして微笑もうとしたが、すぐ取り戻して厳しい表情になり、何も言わずに、すへを睨みつけながら立ち去った。

夜、市子は寝床に入っても、子を産んでくれと言われたことが気になって眠れなかった。——こんなことを頼まれたのは初めてのことだ。

子といえば、自分は渡り巫女だった母親の子だった。

母親は祭りや祭礼のある村とか、市の立つ町を渡り歩きながら禊や祓いばかりか、口寄せもした。自分も母親について渡り歩いたが、その母親が実母か養母かは知らない。父親はいなかったし、誰が父親であるかも教えてくれなかった。夜、母親が旅人の相手をするために宿に行ってしまうと、自分は近くの神社の軒先で寝た。夜の神社は怖かった。男女の逢い引きがあっても、真っ当な仲でないのか、男と女が罵り合ったり、女が大声で泣いていたりした。町人や渡世者の喧嘩とか果たし合いもあった。そんなときは、神社の裏に隠れた。心細くて、母親が早く帰ってきてくれたらなあ、と泣いていたものだった。

やがて、母親を見様見真似して自分も口寄せができる渡り巫女になった。巫女として少しは稼げるようになったころ、母親が病に倒れて動けなくなったので、街道から奥に入った人気（ひとけ）のないこの廃屋に住み着いた。ここでは人々に、市子と呼ばれるようになった。程なくすると、母親は死んだが、死ぬ直前まで自分が面倒みていた。

母親には自分がいたが、自分には子がいない。ということは、病気で動けなくなったときや年老いて巫女で稼げなくなったら、自分を面倒みてくれる者がいないということだ。かといって、今すぐ赤子をつくって、背負いながら巫女業はできない。街道で一夜を共にした旅人の子を産んでも、あなたの子だから養育してくれというわけにはいかない。

そうだ、昼間会った女の頼みを聞いてやって、百姓の子を産んでやろうかな。自分が巫女業ができなくなるまで、あの女に育てさせとけばいい。その代わり、自分

が年老いたら掘立小屋でも脇につくってもらって、あの百姓の家族にでも面倒みて貰うことにしょうか。野良仕事のような力のいることはできないかもしれんが、内仕事はできるだろう。あの女も年老いているころだから、自分が手伝えれば助かるだろう。

で、自分はまだ子を産めるだろうか？　孕んだことは一度あるから、大丈夫かな。思い出したくもないが、旅籠の飯盛り女に、子降ろし婆さんを紹介してもらった。お腹の奥深いところを酸漿（ほおずき）の枝や根とか南天の枝で掻きまわされたり、山牛蒡の根や石榴（ざくろ）の皮を煎じたものを吐きもどすくらい飲まされ、つらい目をして堕ろした。考えてみれば、今度は孕んでもあんなつらい目をして堕ろさなくてもいいのが嬉しいし、母親になれるのが楽しみだ。ただ、自分のお腹を十一箇月、あの女に貸すと思えばいいだけだ。

ここまで考えると、明日あの女と話すことに興奮を感じてきたせいか、身がぞくぞくしてきて眠れず、一晩中体を横たえているだけだった。

翌日の昼下がり、市子はすへに会いに行き、昨晩考えた条件が呑めるかどうか聞いた。

すへはしばらく考えていた。

――この巫女が年老いてから、「生みの親は私だ」と言って来たら、どうなるだろう……？　でもその頃には、親子の情愛は自分のほうにあるだろうから大丈夫だろう。でも一応、念を押しておこうかな。

「夫の子を産んでくれるのなら、あたしは引き受けるよ。あたしたちの子として貰うとき夫にそれを頼んでみる。夫の子だから、嫌とは言わないはずよ。それに、力の要らない野作や内仕事では猫の手も借りたいときがしょっちゅうだから。ただ、その子には母親だとは決して言わないで下さいよ、あたしの立場が無くなるから」

「無論ですよ」と言わんばかりに市子は、首を縦に振った。

このあと、二人の間で話がすらすら進んだ。

すへは出川村への行き方とか家の場所などを詳しく説明したあと、吉十のことも言っておいた。

「夫はあたし以外の女を抱くことが嫌いなので、あたしがあなたを送ったということは一切言わないようにね。それに、夫は据え膳を食わない性分なので、上手く口

説いて下さいね」

すへと話がついた八日後の昼近く、市子は衣装を白い千早と白い襠付きの袴にして出川村に向かった。夕方、吉十の家の前に着くと、畑からちょうど帰った吉十と鉢合わせになった。

吉十が聞こうとする前に、市子が先に言った。

「私は勝川宿から二里ばかり西のほうに行った神社で巫女をしているものですが、神社の命でここの隣村の神社で年中行事のお手伝いをしてきました。行事のあと、何人かの人から生口や死口の口寄せをやってもらいたいと頼まれてしまいました。断ることもできず、頼まれた人々みんなに口寄せをしましたので、こんな刻になってしまいました。帰りを急いだせいか喉が渇きました。水を一杯いただけませんでしょうか」

吉十は市子をじろじろ見た。

「水はあげるよ。おめぇさんは巫女さんかね、へぇー。口寄せもしなさるとな。わしの山の神も寄せてもらえるのかね」

吉十が家の中から柄杓で持ってきた水を、市子は飲みながら聞いた。

「山の神というと、嬶さんのことで？　で、それは生霊ですか死霊ですか？」

「わしのお嬶は先月から町に奉公に行っておる」

このあと急に、恥ずかしそうに小さな声で言った。

「……わしはお嬶がおらんと淋しゅうてならん。わしらには子がおらんので余計淋しいわ」

「そんなことなら、嬶さんの生口を寄せてあげましょう。水をいただいたお礼としてやってあげますよ」

吉十はやってもらうことにして、市子を部屋にあげた。

吉十は市子に向かい合って座り、両手を床につけて頭を下げ、目をつむった。

市子は持ってきた竹の小枝を手に取り、

「この竹は神の依り代であるぞよ。これがそなたの背中を三度叩いたら、神であろうが生霊であろうが、この私に乗り移ってくる。いいかな？」

と、吉十に言い聞かせた。

市子は呟くようだが、高い声で神降ろしを始めた。

「そもそも慎み敬わって申し奉るは、上に梵天帝釈、四天王、下界に至れば閻魔法王、五道の冥官。わが朝は神国の初め、天神七代、地神の五代の御神、伊勢は神明天照皇大神宮……」

吉十は次第に市子の声に吸い込まれていった。自分の意識があるのかないのか分からなくなってくる。ただ、頭越しに背中を竹の小枝で二度叩かれた感覚は覚えている。今度が最後の三度目だと覚悟している。

「……下宮には四十末社、内宮には八十末社……。オオー、嬶さんの命が近づいてきた！　嬶さんの名を呼んでやれ」

「すへ！　すへ！」

と叫ぶと、竹の小枝が背中を打った。

その瞬間から、すへの声が聞こえてきた。

「すへですよ、おまえさん。よくぞ、神様を向けて下さった。すへが戻りました。さあ、子をつくりましょ」

「いいとも」と吉十が言い終わらないうちに、すへが床についている吉十の両手を取って引きづり寄せると直ぐ、体を後ろにのけ反り、背中を床に付けた。吉十の体はすへに覆いかぶさるようになった。すへが耳元で「子を！　子を！」と吉十を急がせる。吉十が激しく腰を動かしていると緊張が次第に募ってくる。緊張が絶頂にさしかかった直後、すへとともに深い穴に落ちていく。穴の底に柔らかく降り立つと、全身の力が抜けてへたり込んだ。目を開いてみると、巫女が自分の体の下で目をつむっている。

吉十が慌てて体を離して床に座ると、市子も装束を正しながら起き上った。

「嬶さんに会えましたか？」

「会えたとも」と吉十は答えたが、何をしたのかははっきりした覚えがなかった。自分の股ぐらが何となく湿っぽい。あれっ、すへと？　そんな筈がない。すると、この巫女と？　そんな馬鹿な、でも、あの快感があったし、目の前には巫女しかいない……。

「巫女さん、わしは何をしました？」

「何もしませんでしたよ。嬶さんと懐かしそうにお話していましたよ」

――そうか、自分の体こそ巫女に乗っかっていたが、すへとは夢の中で抱き合っただけなのか。すへが帰ってきたとき、夢の中でおめぇを抱いたことがあると言え

ばいい。
市子が、今夜は泊めてもらいたい、そのお礼に明日は吉十の田を回って、稲に虫や病気が来ないようにお祓いをすると言う。
吉十は歓迎した訳ではないが、夜に巫女を放り出すわけにもいかず承知した。二人は部屋の別々の隅に大きく別れて寝床をとった。

翌朝、二人が吉十の最初の田に向かう途中、五人組の筆頭（ふでがしら）、権造にばったり会った。権造に何をするのだと聞かれたので、吉十は「田のお祓いを巫女さんにしてもらうのだ」と答えた。
権造は市子を注意深く見詰めていたが、何も言わずに最初の田まで付いてきた。
市子は権造を無視して乾いた田の真ん中に進み、竹の小枝を突き刺し、お祓いを始めた。畦から眺めている吉十には、市子の背中まで垂れている油気のない黒髪が神々しく見える。
権造はそんなことお構いなしに、
「吉十、あの女は本当の巫女ではない。あいつは市子といって、街道で銭離れのいい旅人を見つけては春をひさぐ女だ、遊女の類だ。あんなものに、お祓いをさせると凶作になるぞ」
と、吉十に低い声で囁いた。
吉十は権造に逆らって、巫女を庇った。
「筆頭、あの巫女さんが田圃を悪くするとは思えねぇ。お願いですから、お祓いさせて下せぇ」
「おめぇ、そう言うけど、変な女にお祓いさせて、却って稲の出来が悪くて年貢米が足りなくなりゃ、五人組が連帯で責任を負わなくちゃいかんぞ」
権造は一息つくと、吉十に止めを刺すように言った。
「わしがいつも寄り合いで、読み聞かせる五人組帳前書に、『遊女、野郎すべて遊者の類一切村方に差し置くべからず。一夜の宿をも仕りまじく候……』とあるやろう。違うか、吉十？」
権造が小声で罵りながら立ち去るまで、吉十は黙っていた。
吉十の田畑全部をお祓いするのに夕方までかかったので市子はもう一夜、吉十の家に泊まることになった。

三

すへが収穫したばかりの小豆を干し場で広げていると、吉十が稲のはざ掛けから帰って来た。

「すへ、今度の冬にも町へ奉公に行くか？」

「今は勘考しているところですが、吉十さんはどう思います？」

「わしか？　おめぇが行きたけりゃ……」

吉十が言い終わらないうちに、五人組の一人である半助の娘のちせが干し場に飛び込んで来て叫んだ。

「道祖神裏の小屋で、女の人が、すへさんを呼んでくれ、と呻いているよ」

二人とちせは道祖神へ走って向かった。

走りながらちせは、「いつものように子ども組が道祖神をきれいにしようとすると、裏の小屋から呻き声が聞こえる、覗いてみると、女の人が腹をさすりながら寝転がって苦しんでいた」と言った。

三人が小屋に着いてみると、長着を着ている女が苦しみもがいている。

あの巫女だ、と吉十はぎくりとした。

すへも驚いた。服装と髪型は変わっているが、以前に大曽根で頼みごとをした市子だ。

すへは子を産んだことはないけど、女が産気づいて苦しんでいることは分かる。

「吉十さん、筆頭の婆さんを呼びに行って！」

権造の母親は、とりあげ婆さんと呼ばれ、この村の出産の介助をしている。

吉十は権造の家に走りながら、ちせが叫んだことを思い出した。

――どうして、すへを知っているのだろう？

権造の家に着くと、運よく婆さんがいた。婆さんが権造の妻である嫁と一緒に家を出るとき、吉十には桶に水を入れて持って来てくれと頼んだ。

権造も気になるのか、「わしも行く」と言って飛び出した。

吉十が小屋に水を持って行くと、すへと権造が外に立っていて、出産の様子を知

ろうと小屋からの呻き声と婆さんの励ましの声に耳を傾けていた。
すへには経験がないが、出産の苦しみは聞いて知っていたので、小屋から来る喘ぎの奇声を聞くと顔を歪めた。
権造も小屋に着いたとき、女の顔を見たらしく、
「吉十、あれは田圃のお祓いしていた女だろう？」
と、吉十の顔を覗き込んだ。
吉十は表情を変えずに下を向いた。
「やっぱり、来たんだわ」と、すへは心の中で呟いた。
権造が立ち去ると直ぐ、すへは吉十の顔を見つめた。
「吉十さん、あの女の人に子が生まれたら、男でも女でもいいからあたしたちの子として貰いませんか？　これも何かの因縁でしょう」
「そいつは良え料簡だ」
自分の子かも知れないと思うと、吉十は承諾せざるを得ない。
すへが今度は頼むように言う。
「その子が大きくなって嫁を貰うとか婿をとるとかになったら、あの人も年老いているでしょう。もし身寄りがなかったら、家のそばに離れの小屋でも造って、住んでもらいましょうよ。軽い農作や内仕事もやってもらえば、助かるでしょう」
吉十はそれには、「そこまでしなくとも」と渋った。
そのあと二人は黙って、小屋の中へ聞き耳を立てたが、何も聞こえてこない。呻き声が無くなったら、次は赤子の産声だろうと二人とも期待していた。
小屋から出てきたのは、婆さんと嫁であった。
「赤子は男だったけど、死んで出て来た。へその緒が体に絡まって、血の流れが止まったのだろう。でも、十月十日（とつきとうか）にしてはちょっと小さかった、早産だな」
婆さんは他人事のように告げると、吉十とすへに向かって死んだ赤子の始末について指示した。
「赤子は村の子ではないので、村の墓に埋めることはならない。ご先祖様たちが許してくれないだろう。村外れの林の縁（へり）にでも埋めてしまいなさい」
吉十とすへは女に左右から肩を貸すようにして支え、女を自分たちの家に運んだ。道すがら、女は死んだ赤子を残してある小屋のほうを何度も肩越しに振り返った。
「今夜はわしらの家で泊っていきなさい」と二人は女に言いおいて、藁むしろを持っ

てもう一度、道祖神裏の小屋に向かった。
小さな亡骸を藁むしろに包んで埋めていると、吉十は自分の子を亡くした悲しみに襲われた。
すへは夫の血がつながった子に不憫を感じて、目をつむりながら冥福を祈った。
その夜は、死産の穢れを祓うため、三人とも手足を水で拭い清めて、床を取った。すへの床は真ん中で、左に少し間をおいたところが吉十で、女の床はすへの右だが間が大きくあって、ほとんど壁の下だった。

三人とも眠れず、各人各様の思いを暗闇に走らせた。
すへは真っすぐ上の黒ずんだ梁を見ながら、市子が夫と関係があったのかを考えていた。権造様も、市子が田圃のお祓いに来たと仰っていた。来たことは間違いなさそうだが、夫と市子は交わったのだろうか？　そうでなければ、出産間際に、あたしを頼ってここに来るわけがない。けども、あの赤子が夫の子だとどうして言ってくれなかったのだろう？　夫のいる前で声を出して言えないにしろ、耳打ちぐらいはしてくれてもよさそうなのに……。分からないのは、隠しごとを全くせず、何でもあたしに話してくれる夫が何も言わないのはどうしてだろう？　やっぱり、関係しなかったのだろうか？　それとも、市子とのことを打ち明けないのは、あたしに悲しい思いをさせないようにかなぁ？

吉十もすへと同じように黒ずんだ梁を見ながら、この女が巫女として来たときに起ったことを思い出していた。
あのとき夢の中ですへと子をつくろうとした。我に返ると自分は巫女の腹の上にいた。巫女と交わったような気はしたが、はっきりしないので、すへには、「夢の中でおめぇを抱いたよ」と、言っておこうと思った。
次の日、田圃全部のお祓いをしてもらったが、終わると夕方になってしまったので、筆頭の忠告にも拘わらず、内緒でもう一夜泊ってもらった。
その夜、巫女はもう一度、嬶さんに会いたいかと聞いてきた。すへに会いたかったし、欲情がむらむらと湧き出てきたので、会いたいと答えると、巫女は昨夕（ゆうべ）と同じことを始めた。今度は、すへを抱いたのではなく、巫女と交わったことははっきり意識にあった。終わってみると、体の支えていた芯がなくなって虚ろな感がした。

同時に、すへには悪いことをした気が襲ってきた。すへが大曽根から帰ったら詫びようと思っていた。けど、自分を信頼しているすへの顔を見ると、巫女と関係を持ったようなことを言い出すことができなくて、ついつい今日になってしまった。

女は手枕で横向きに横たわっていた。鼻の先にある壁に向かって、「神に仕えることをしている私なのに、どうして神は……」と呟きながら自分の運を呪っていた。

自分の老後のために、すへさんの亭主の子を産まなければと、万全の用意をしてきた。ひと月の内で一番、子を宿しやすい頃にここへ来た。生口寄せをやりながら、たやすく亭主に私を抱かせた。もう一夜ここに泊まるために、田のお祓いをわざとゆっくりして、夕方まで時を稼いだ。亭主を口寄せに誘ってみると、荒々しく体を合わせてきた。口寄せは要らなかったほどだった。

二度も交わったから、これで子を宿したことは間違いない筈だった。ところが、程なくすると月の障りがあった。これでは目論見が台無しになってしまうので、街道でめぼしい旅人二人を次々に誘って夜を共にした。ひと月もすると、子が宿ったことが分かった。それから段々、お腹が大きくなった。二日ばかり前、腹が痛くなり始めたので、ここへ向かった。途中、あまりの痛さに、あの小屋に転がりこんでしまった。あーあー、この子を自分の体ごとここに持ってくれば、万事がうまくいくはずだったが……。

それはそうと、亭主に口寄せをしたときは、間違いなく子ができる頃だったし、二度も交わった……。この夫婦に子が出来ないのは、すへさんが石女でなくて、どうも亭主の精気には子種が無いせいだな……。可哀想に……。どう伝えたらいいのかな？

翌朝。

すへは吉十や女よりも早く起きて、朝飯の用意をした。脚のない膳というより盆を四つ、それぞれ囲炉裏周りの横座に一つ、客座に二つ、鍋座に一つ置いた。それぞれのお盆に粟や切干大根を炊きこんだ飯の椀と味噌汁の椀を乗せた。

横座に座った吉十が、客座に座った女の横の膳を見て、すへに尋ねる。

「すへ、あれは？」

「あの子の陰膳（かげぜん）ですよ」

吉十が唇をしっかりつむって、「うむ」と唸ると、女はすへに手を合わせてお礼の意を表した。

三人は無言で食べ終えると、白湯を飲み始めた。

「あの子が生きていりゃ、里子に貰えたのにねぇ、吉十さん」すへが口火を切った。

「それはもう言うな、すへ」吉十が叱りながら口封じをした。

女は何も知らないような顔つきで聞く。

「すると、お二人にはお子がいないの？」

「血のつながった子を欲しいとずっと思ってきたけど、あたしたちには出来なかったの」

「そう、それは可哀想に。そんなに血のつながった子が欲しいなら、ご亭主が別の借り腹を使うか、すへさんが子種を変えてみるとかしては？」

一瞬、吉十とすへは女の言葉に驚いて顔を見合わせたが、すへは直ぐ、本気で反論した。

「吉十さんは男だから他の女と寝てもいいけど、あたしに子種を変えろということは、間男（まおとこ）をすることになるでしょ。あたしが間男をしてお仕置きを受けるとなると、吉十さんは相手の男を殺さないと本夫の面子が立たないでしょ。そんなことできないでしょう？」

「そうだな、おめぇが他の男に構われるなんてことは考えたくもねぇ。間男を殺すのを妻敵討（めがたきうち）って言うんだろう。そんなこと、わしにはできねぇ」

「密通で死罪や流罪のようなお咎を受けるのは、お武家さまの奥さまですよ。町人の女房の場合は償い金をもらって和解したりして、表沙汰にはしませんよ。お上には訴え出ることは滅多にありませんよ……。とにかく、こんなに嫌さん思いのご亭主を変えてみては、なんて言ってしまって、ごめんなさい、冗談ですよ」

冗談にしても、こんなことを女がどうして言うのか、吉十には初めは分からなかった。だが、女と目が会った瞬間、頭にぴんとくるものがあった。冷や汗が体中を走った。

「厠（かわや）に行ってくる」

吉十は立ちあがって、外に出た。厠には行かず途中で立ち止まって、女が言ったことを考えた。

――女があんなことを言うのは、死んだ赤子はわしの子ではない、わしの子が宿

らなかったのだ。わしらに子ができないのは、すへのせいだ、とわしも思ってきた。それは、わしのせいだ……。すへ、済まん。二人だけになったら、全部話すから……。

吉十は溜息を一つ吐くと、別のことを考え始めた。

――わしらに血のつながった子が欲しいなら、すへがわし以外の男から子種を貰うしかないのだろうけど……。すへが他の男と……。わしは嫌だなぁ、どうしたものかな？

あまり長い間外にいると怪しまれると思って、家の中に戻って横座に戻った。

「吉十さん、厠、長かったね」

「まぁ、ちょっとな」

吉十の深刻そうな顔付きを無視して、すへは明るく言った。

「この人にもう一度、子を産んでもらって、里子としてあたしたちが育てることに、あたしが決めちゃいました。いいでしょう？」

自分の子をつくれないと知った以上、吉十は反対できない。

「そうだな、わしもそうしようと考えていたところだ」

「それから、この人だって、あたしたちに子をつくって、ただで差し上げますというわけにはいかないでしょう。何か、あたしたちが償うことができればねぇ？」

すへは吉十から答えを引き出すように仕向けた。

「すへ、おめぇが言っていたように、この人が年老いたら、ここに来てもらおう」

女は二人のやりとりを聞くと、体中に温かい血が駆け巡るように感じる。

――よし、この二人のために、銭のある男ではなく、気性の優しい男を見つけて、子を産んでやろう。それが自分の老後にも良いことだから。

女が暇を告げると言うので、すへは死んだ赤子を供養してからにしましょうと提案した。

亡骸を埋めた場所に着くと、吉十は持ってきた板切れを立てて卒塔婆にした。頭を下げたが、ほんの少し不憫な表情を表しただけだった。

すへは愛おしそうに卒塔婆を何度も撫でたあと、鼻先につくほど両手を顔に近づけて、短くお経を唱えた。

女は卒塔婆には一度だけ手を合わせたあと、吉十とすへに向って何度も拝むよう

に手を合わせた。
やがて、女は自分の未来が保障された気分になってか、下街道のほうに元気よく向かって歩いて行った。歩きながら、二人のほうに二度も振り返ってお辞儀をした。
女が三度目のお辞儀をしたとき、山鳩が鳴いた。
「テデ、ポーポー。テデ、ポーポー」
「父(てて)、恋しー、父、恋しー、と鳴いていますね、吉十さん」
「すへ、あのな、あの子の父親はな……」
次を言おうとしたとき、すへが人差し指を吉十の口に当てた。もう何も言わないで、という仕草だった。
「あの子の父親が吉十さんでなくて、良かったわ」
「すへ、おめぇは賢くて好(え)えお嬶だな。もう、大曽根どころか、どこにも遣らねぇぞ」
吉十は、口にまだある人差し指を除けるふりをして、すへの手をしっかり握った。
二人が見詰め合うと、山鳩が逃げるように林を飛び去った。

（了）